



離れの入り口近くに、使い古したリュックが一つ置かれて
いる。二日前から伊藤が荷造りを始めたからだ。そんなにた
くさん荷物はないが、二カ月の間に買った下着やTシャツが
入っている。伊藤が出ていくことを決めた時そのままあげら
れる鞆か何かないかと探すと、大学時代に使っていたリュッ
クが押し入れの奥から出てきた。目立つ汚れはないので、少
しかび臭いがそのまま持たせることにした。

この後町内会の集まりで両親が家を空ける時間に、伊藤を
実家に送り返す。ここまで来たら最後まで隠し通して何もな
かったと装えるだろう。家族経営しながらも適度にある距離
感が、ことを静かに終わらせてくれようとしていた。

日が落ちるのも早くなっている。秋の日はつるべ落しと
いう言葉が相応しい。夕方六時からの集会には隣町までバス
で向かう。集合時間にはまだ明るさが残った空も、町内会の
面々が発する頃には明かりが灯る。主人がいなくなり、ど
の家も静まり返るだろう。

未だに、伊藤を調理場に引き込み、一緒に過ごした理由が

自分の中ではつきりしない。

反射的というほど切羽詰まった状況でもなく、困っている人がいたら、助けるものだという善意で動いたわけでもない。影の中にいる相手が伊藤だとわかって、やはり魔が差したのだ。虐められていた同級生の現在の姿を少し見たかっただけなのだ。噂で聞くことができないことは、この目で見ることができない。わざわざ調べるほど興味がないことでも、目の前にあれば見てみたくなるものだ。そのくらいの軽い好奇心と、やはり人として見るに堪えない姿だったことで少し同情した。疲れ切って、ズタボロになって帰ってきた自分の姿を重ねた。そのあたりの気持ちが複雑に絡まって、この期間の行動を作っているような気がした。

「これも持つていいの？」

伊藤は、まだおろしていない新品の三組の靴下を持つて言った。男物の靴下だから十分自分の靴下として使えるが、これも銭別だと思って持たせた。

「持つて帰れよ。他に靴下三つしか残ってないだろ」

「ありがとう」

ここまで素直なやつだっただろうか。今後は会ったとしても偶然ショッピングセンターやスーパーですれ違うくらいだろう。次はいつ会おうなんて話は、どちらもしない。この期間が特殊だったただけだ。

「もう少して、親父たちは家を空けるから、その時行こう。家の近くまで送ろうか？ 歩いたら一時間はかかるだろうし、その時に誰かとすれ違うかも」

「どうせ家に帰ったら、いろいろ聞かれるし、警察に行くことにもなると思う。この地区から出られれば、同級生だからって翼や五十嵐さんにも迷惑かけないと思うし」

「……五十嵐さんって、紅美のことか。親戚なんだってな」

「だいぶ遠い親戚だけだね。嫌だよ。いつまでもこういう関係が付きまとうんだ。五十嵐さんだって、学校じゃ全然関係ない人だったし、成人式も行っていないから、どんな顔なのかも知らない」

「ま、そうだよな。じゃあ、荷物確認しとけよ」

「家まで送らなくていいよ。ここから歩いて帰るくらい一人で行けるから」

母屋の様子を確認するために、土間の扉を開けると、今扉を叩こうと手を丸めた紅美が立っていた。

「え？」

びっくりして履いたサンダルが少し滑った。

「ごめん。町内会の集まりの前に。この前お野菜もらっちゃったから、筑前煮持ってけって言われちゃって。翼の夕飯につて……」

紅美の瞳孔が開いて、何を見たのか察するのは容易だった。どうすりゃいいんだよこれ。諦めの方が先に来る。頼むから大声出すのは辞めてくれよと思い、次の動きを見る。紅美は口が開いたかと思うと、タッパーに入れた山盛りの筑前煮を忘れたみたいに指を差そうとするので、代わりに底を両手で支えた。

「どういふことなの？　だって、そこにいるの伊藤君でしょ？」

流れで受け取ったタッパーを畳みの上に置く。説明はこれからだって大丈夫だ。自分にも落ち着くように言い聞かせる。本当に、事を大きくだけはしたくない。

「えっと、その……」

それでも続きが出てこない。友達でもなかった、いじめの当事者でもなかった、何かあれば関係性を伝えられるが、俺たちはクラスメイトだったわけでも部活のメンバーであつたわけでもない。

「ねえ、行方不明だったって、知ってたでしょ？」

紅美が眉間に皺を寄せて、胸倉を掴んでくる。思わず降参のポーズで、視線を逸らしてしまった。落ち度が自分にあるような姿をしてしまう。

「どうして言ってくれないの？　いつからいるのよ。何なの？」

前後に二回揺すられた後、胸倉を掴んでいた腕が離れた。

「紅美、とりあえず、扉閉めさして。親も知らないんだ」
扉を閉めようと腕を伸ばすと、背後で動く足音がした。

「伊藤？」

呼びかけを無視して、開いていた扉から黒いスウェットの男が飛び出した。夜帰る時目立たないように、着替えていた寝間着だ。

「どこ行くんだよ」

飛び出した伊藤は、庭でスニーカーを履き、家の前の道を左に曲がっていった。もう外は泥を被ったように全体が黒ずんでいる。今は視認できるが、時間が遅くなると見つけれられなくなってしまう。

「紅美、悪いほんと。俺、追いかけるな」

「ねえ、私だって心配したんだよ。親戚って名前知っていた子が中学でいじめられて、先生のお通夜で姿見て、その後伊藤君の家族も必死に探して……なんで翼の家にいるの？」

紅美は目尻から流れた涙を拭いた。

「ごめん、混乱しちゃって。一生懸命探していたのも、私じやなくて伊藤君の家族なのに……私は、また何もしてない」

「……紅美、今度伊藤がここにいた間のこと話すよ。俺も、

紅美と一緒にだ。伊藤に、何もしてない。でも心配したりはしたんだから、忘れているやつらや心配もしてないやつらよりは、きつといい人だ。いい人だから……」

「何もしてないのと同じじゃない」

紅美は力の抜けたパンチを、俺の左胸に一発決めた。何もしていないのは、きつと違う。俺たちは、中学時代のことを後悔したし、今だって伊藤が死ぬことを望んでない。

死ぬ？ 伊藤が？ なんで走っていったんだ？ 紅美に見つかったから？ 俺以外に存在がバレたから？

「俺、行くわ。暗いし慣れた道でも、勢いで走って行っただけ」

用水路に落ちて死んでいた男のことが脳裏に浮かぶ。結び付けるな。伊藤は、前向きに帰ろうと決めたじゃないか。そうわかっていても、万が一ということもある。こんな短期間一緒にいた相手のことなんか、ほとんど知らないのと同じだ。「絶対話すから。親父たちまだ母屋にいるからさ、叔母さんからの筑前煮渡してやって。あと、伊藤のことは……」

「わかってる」

残りの涙を拭ききると、紅美はタッパ―を持って立ち上がった。

俺もスニーカーを履いて、スマホと犬の散歩用の懐中電灯も取り出す。暗くて伊藤が見つけづらいかもしれない。

「翼、ありがとう。伊藤君見つけてきて」

手を上げて挨拶すると、紅美は母屋へ、俺は伊藤の向かった方向へ走った。見つけた訳ではないことも、初めは自分もよくわからないまま引き入れたことを話そう。これ以上自分に惨めになる必要はないんだから。

伊藤が曲がった方向は、犬の散歩コースの定番だ。右に周ることもあるが、大体は左に曲がってあぜ道を一周する。伊藤に初めに教えた散歩コースだ。慣れているから、暗い田んぼ道で転んでいることはないはずだ。あとは、散歩道を外れていないことを祈るしかない。街灯が少ない所に行かれては、懐中電灯でも見つけるのが難しい。

気持ち逸り、小走りになる。道の色が灰色から黒に変わり、しっかりと走れるのは街灯の下で道が照らされている二、

三メートルだけだ。数分前に走り出したから影や足音がわかったっていい。遮るものがない谷津の暗さは、底なし沼の最深部みたいに音まで飲み込んでいるようだ。自分の靴とアスファルトの間で擦られる砂の音しかない。ぽつぽつと、ぽおつと光る漁火の下に、せめて人影が見えないか注視しながら、前に進む。

普段の散歩なら右に曲がる地点で足を止めて、目の前の広い水田が集まるエリアを見つめる。区画整理される前からの田んぼもあり、周辺から集まったあぜ道が五差路になって交わっている。散歩の分岐点は人家を離れ、一際広い道が用水路の隣を平行に走っている。その先にある沼土手までせいぜい八百メートルくらいの窪んだ土地とわかっていても、無限に広がっているように感じる。百メートルくらい先の一か所に欄干付きの橋が架かり、大きなオレンジ色の外灯が辺りを照らしている。その下には、この前死体が見つかった用水路が直角に交わっている。

「せめてそろそろ姿だけでも見せてくれよ」

ボソツと零した声に応えるように、オレンジ色の光の下にぼんやりした人影が現れた。一瞬動きが止まったかと思うと、欄干に手を伸ばし欄干をよじ登るような動作を始めた。

「伊藤！！」

本気のダッシュも、腹の底から叫ぶのも、もしかしたら中学の部活以来かもしれない。久しぶりの動きに、身体も脳も混乱する。足は縛れてついてこないし、思い切り振る腕も背中の方に動かない。もっと早く動け！と命令してもどこかで邪魔されて指示が届かない。もっと日頃から動いているべきなんだ。三十代は若いと言っても、十代、二十代とは違う。健康に氣を使い始める歳でもあるし、いざという時に走れないと、こんな風に困るんじゃないか。

普段の自分の生活を責めてもしようがない。今は、あの明るい所にいる人影を、伊藤を止めたい。そのためにはあと何秒ある？この距離をこのスピードで足りるのか、橋の下は何メートルあるのか、水は流れているのか……この状況の顛末が、少しでも少しでも、どうかマシなものであって欲しい。

体に力を入れすぎるな。力むな。じゃないとせつかく追いついても次のプレーにつなげられなくなってしまう。足首と膝を柔らかく使って、今度はこっちの攻撃に切り替える。試合の流れを感じて、メンバーの士気を高めて、リングを狙え！

「伊藤！！！！」

スウェットの上着を思い切り引いた。欄干の上に立っていた黒い人影は、簡単に倒れてきた。勢いに合わせて自分も地面に倒れる。受け身は取ったけれども、左の掌を強くアスファルトに打ち付けた。火傷したように掌が熱くなる。引き倒したスウェットの男は、やはり伊藤だった。俺の上に倒れてきたので、頭や背中では打ってなさそうだ。

久しぶりの全力疾走で、息が戻らない。伊藤は驚いて伸びたままだ。

「あつ、あつ、はあ、危ないだろ。ここ、結構高いぞ」

俺だとわかったら、伊藤が自分の上で力を抜いたのがわかった。

「俺、別になんかしようとしたわけじゃなくて……少しだけ、ここで死んだ人のこと考えていただけなんだ」

「ど、同情だか何だか知らないけど、橋の上に立つのは危ないだろ」

伊藤の下から抜け出して、欄干を支えに立ち上がった。酸素はまだ足りない。立ち眩みと最後のダッシュをきめたせいで、額から全身から汗が噴き出てくる

「周りから見ればそうだね。さっきはビククリして走ってきちゃって、なんかこの辺まで来たら落ち着いてさ。あーそういうばと思つて橋から用水路見ていただけ。そしたらちょっと高いほうがいいかと思つて、欄干乗つていただけ」

欄干を背もたれにして空を仰いでいると、見えない所で「ごめん」と謝る声が聞こえた。

余裕がなくて、片手を挙げて聞こえたことに反応する。こいつ今、初めて俺に謝ったかも。

「何で上から見たの？」

伊藤視点を確かめようと身体を回して橋の下を見る。用水

路の役目が終わった秋となると、水量がだいぶ減つて背の高い雑草の方が目立つ。高さは二メートルくらいか。打ちどころ悪ければという心配もあるけれど、落ちたとしても足をくじく程度だっただろう。ここで亡くなった人は、この状況だけで言うと、運が悪かった……病気や他の理由があるとする

と、そうは片付けられないが。

「あの人は、自分だったかもしれないと思うと、やっぱり他人事とは思えなくてさ」

ドキリとして隣を見ると、伊藤も欄干によりかかりながら下を見つめる。死体が見つかった時は、こいつを家に帰す口実にしようとしていた。今は伊藤と同じだ。何か失敗して、暗闇の中を歩くことになった時、何かのきっかけで、いつ用水路から上がる死体になるかわからない。生きること自体が本当はいろんな危険と隣り合わせなのだ。

ここはどこかに似ている。何もかもから拒絶された、道しるべも出口もない暗闇だ。

伊藤の暗闇の中は、きっと中学のいじめの時からあって、

俺はあの先輩とのカフェが失敗した時期だった。俺たちは同じ色の暗闇にいたわけではない。けれども歩いてきた場所はずきつとこの橋にたどり着くまでと同じ、どこまで広がっているかわからない、暗く冷たい、沼の底だ。

そしてこんな橋を見つけては、少し休んで、自分たちよりも深い闇に落ちた人に思いを馳せる。そうして安心する人もいれば、同情する人もいる。孤独で、慈悲のない作業だ。それを今、俺と伊藤は一緒にやっている。まったく縁のない間柄でも、ここでは隣にすることができる。

「さつき紅美が来た時……ああ、誰にも言わないようには言っている」

「うん。なんだか恥ずかしくなっちゃってさ。もう十分年取ったはずなのに、伊藤君は……っていろんな人に思われてんだろうなって。なあ、俺だって恥ずかしいと思うことあるし、普通の人のようにしていたかったよ。友達とか、作ってさ。でも俺はそうじゃなかったんだよね」

伊藤も同じ距離を走ってきた。ひよろひよろの身体は、欄

干に立つのもやっただただだろう。所々息切れが混ざる。

友達もできず、そのまま学生生活が続けた伊藤は、佐伯先生とはどんな関係だったんだろう。お通夜に来るには、それなりの理由があったはずだ。数か月一緒にいても振る機会がなかった。伊藤と俺の一番の共通点なのかもしれない。

「伊藤は、佐伯先生と卒業後も親交あったのか？ ほら、紅美が姿見たのもお通夜の時だったし」

最後の機会だと思い、伊藤と佐伯先生のことについて尋ねた。もう会うこともない、だったらそのお通夜の後にどうして行方を眩ましたか、俺には聞く権利だってあるだろう。

伊藤は少し考えた後、話し始めた。

「佐伯先生っていい先生だっただろう？ 少なくとも、翼や他の人たちにとっては。俺も面倒見てもらった。だけど……翼が思うようないい先生ではないかもしれない」

伊藤がゲイであることを知っている身としては、その話しぶりを聞いて胸が騒めく。やめてくれ、聞きたくない。尊敬できる人を潰さないでくれ。

「ああ、ちがうよ。先生はゲイじゃないし、別に先生は俺をそういう目で見ていたわけじゃない。でも、今まで通りの佐伯先生ではなくなるかもしれない。俺が知っている佐伯先生の話するだけだから」

進路指導室に呼ばれたのは、その日が二回目だった。進路指導室は、実際進路相談に使われることはほとんどなくて、こういう問題を起こす生徒が呼ばれて、先生と話し合いをする場所だ。初めて呼ばれたのは、派手にいじめられた日。トイレでバケツの水を上から被せられた。いじめの発端は、清水という学年のムードメーカーだったが、水を被せられたとき清水はトイレの入り口の方について、実行したのは、隣のクラスのお調子者だった。もう名前も覚えていない。けれども、そいつが俺の名前を呼んでにんまりと笑い、バケツの汚れた水をありったけの力でぶちまけてきたときの記憶は、今でも残っている。

この後は、むしろ清水も、やりすぎだろ、片付け誰やるんだよ、といじめっ子とは思えない真つ当なことを言っていた。これだけ派手にやれば、先生も気づく。そこを少しでもうまくやるのが主犯格だ。

保健室のバスタオルを被せられ、進路指導室に入れられた。バケツの水を被せた犯人の方は、担任の先生が職員室に連れて行ったらしい。

二回目は、両親も含めた謝罪の機会を設けた後のことだ。どうやら、その後もいじめは続いていると気づいた佐伯先生が、放課後進路指導室に来るようスケジュールを組んできた。生徒指導担当をしていたから、話を聞く先生として選ばれたのだろう。

進路指導室は清掃担当を振り分けられていないせいか、他の部屋より埃っぽく感じた。高校受験の過去問題集や学習用の雑多なテキストが壁にひしめくように置かれ、教室の真ん中は二分するように金属製の本棚で仕切られていた。入る扉が前か後ろかで、用途が分かれている。向こう側は完全な資

料室で、先生が座って待っているこちら側には、灰色の背の高い本棚以外に長机とパイプ椅子が置かれている。保護者も含めて話し合いができるように、自分の側には三脚詰めて置いてある。

「座って」

先生が促す。早く終わらせて、帰りたいのだろう。いじめっ子にしろいじめられる側にしろ、先生にとっては「問題のある生徒」であることに変わりはない。

おとなしく言うことを聞いて、パイプ椅子を引いて座った。静かに床を滑らせて、ドカツと音を立てて座るような態度の悪い真似はしない。先生だけじゃなくて、俺だって早く帰りたい。いちいち指摘されるような態度をとらないこともやり過ぎすには気遣う点だ。学校に引き留められるより家に早く帰れる方がましだ。母親が農作業やパートから戻れば夕飯は作ってくれるし、父親が仕事から戻るのとは八時過ぎだ。祖母は畑が終わり夕飯を食べるとすぐに寝てしまう。みんな日々のことで精いっぱい、俺のことはほっとしてくれる。犬の

散歩にでも行っておけば、問題なく明日になる。

「大人気ないこと言って申し訳ないけど……」

先生の第一声は意外だった。大人気ないこと？ 俺は、最近クラスメイトや友達とうまくやっているか？ とその辺の無難で無意味な質問から始まると思った。ああ、はい。別に。という頷きを繰り返し、問題がないと言っておけば、干渉はなくなっていくだろうと思っていた。さすがにもうバケツの水を被せられるような生活に影響することはないから、シカトや嘲笑は無視すればいい。自分に降りかかるものは、それでほとんど解決できる。余計なことはいらないで欲しい。

先生と視線を合わせると、この間も自分のことを観察していたのだとわかった。続きを話していいものか確かめているようだった。

「学校の先生になる人は、子どもの時勉強のできるいわゆる良い子が多いもんだから、君のような生徒を目の前にすると、どうしたらいいかわからないんだ」

余りに率直な言葉に、どう反応してよいかわからない。いじめられているのか？と初めて聞いてきた担任は、必死に親身になって話を聞こうとしていた。問題を解決しようと、俺よりも真剣に悩んでいた。それでいながら、派手な一発だけを見て解決した気になっている。本質を見抜けない大人たちが、周りには大勢いる。自分の家が生活にも困る配管・鉄鋼工場で、学校の成績だって下から数えたほうが早くても、薄っぺらい人間を見抜く直観がある人間の方が、強い。

佐伯先生は冷静であると同時に、瞳の奥は冷たかった。言葉の通り、関わろうとする気がないように見える。

「今回のこともね、正直見ないでいた先生が多かっただろうね。伊藤君の学校生活の問題は、あれで解決したと思いたいんだ。先生だけじゃない。大人たちは真剣に真正面から君を相手にしていると、仕事が滞ったり家事が進まなかったりしてしまうから、細かいところまで見ないようにしているんだ。そういうトレーニングを積んでいるんだよ」

先生は一度話を止めて、反応を見ていた。やる気がなさそ

うに肘を机について、顔をその上に乗せた。

「うん。さらに困ることは、君くらいの年齢の子は、先生がこんな冷たいことを話すと、ショックを受けたり傷ついたりするものなんだけどね。もう素直な子どもじゃないんだよね」
何か言い返そうと思っても、言葉が出てこない。そのどこがいけないのかと反発したい気持ちもあるが、佐伯先生がどう感じて考えているということに無関心でもある。

「今はまだ、返せる言葉がないだろうけど、大人の本音はこうなんだ。君は扱いにくい生徒ですと言う方が的確かな。たとえこちらが本当に君の気持ちを聞きたくても、なかなか大人には教えてくれなさそうだ」

反論できないことに悔しさを感じ、睨むように佐伯先生を見てしまった。勝てない大人が目の前にいた。手に負えないと持て余されているはずなのに、こちらにも向こうにも、相手を何とかコントロールしてやろうという気持ちがない。水の流れを読み合うだけで掴みどころがない。

「まあ、大人は細かい所までは見てないけれど、近くにいろ

ことだけはわかってもらえればいいか。それと、約束しよう。君が卒業するまで、月に一回、こうやって話をしないか。来たくない日は来なくなればいい。君に必要なのは、これからも孤独で一人で生きていく強さを持つことだ。まだまだ足りないのは、子どもだからね。偏屈さはこのまま変えられそうもないから、君はもっと強くなったほうがいい」

「俺と先生が繋がったのはこれがきっかけだったんだ。さすがに月一は行かなかったけど、これが中学に通えていた仕組みなんだ」

「佐伯先生、そんなこと言っていたのか？ そんなストレートに中学生に言うなんて……俺たちへのバスケの指導の仕方とは正反対というか、決めつけるような言い方……」

佐伯先生の指導は、生活も部活も自分から動くがモットーだった。だから、優弥が顧問であり職場の同僚でもあった佐伯先生を尊敬していたのだ。自主や自律を教えて、中学生で

も対等な一人として相手をしてくれた。佐伯先生の伊藤への態度は知らない。高圧的でも暴力的でもないけれど、相手に合わせたというには教育者らしくない。

「先生は、最近どんないじめをされたか、授業で何を間違えて笑われたか、どんな時無視されたかを聞いてきたよ。答えると、ふうんとか言いながら、どう思ったかどんな態度をとったか聞いてくるんだ。その後、もつといい考え方や言い返し方を教えてくれるんだ」

「中学生に？ 教えるのか？」

俺は初めての種類の驚きを隠せなかった。絶対優弥はやらないだろう。何かで明るみに出たら、教師は問題になりかねないんじゃないか。

「はは。そんな真面目に聞くなよ。……俺の唯一の笑える話なんだから」

「いや……」

今度は逆に重い。伊藤の一つ一つのエピソードが重い。同じようなことを繰り返して、経験している俺とは違うんだ。

「先生面白かったよ。言わなくても、頭の中で言い負かしてやったり相手の矛盾をついたりさ。話すのは苦手だったから言い返し方は全然使えなかったんだけどね」

「伊藤って、なんか適わないな。そういう所知らなかったし、強いんだな」

俺は伊藤の努力を労った。俺が同じ立場だったら……学校に通っている自信はない。人生の初めの方を既定のルートには乗れてただけで、自分本来の強さは伊藤の方が何倍もある。

「もともと偏屈だっただけだよ。佐伯先生は、俺に一番いい方法を選んでくれた。中学卒業後は今までみたいにはいかなけれど、時々会ってまた同じように話をしていたよ。いつからかは俺の方がクソみたいな論理思いつくようになったけどね」

「ハハハッ」

うまく笑えたかはわからないが、伊藤は満足そうだった。
「……先生のお通夜に行って、悲しかったしショックだった。

あと、皆の知らない先生の一面を知っている優越感があった。なのに、皆が知っている先生を知らない自分がいるんだ。お通夜に行ったあと、俺はどうしてもそれに耐えられなかったんだ」

欄干の先に肘から先を出したまま、伊藤が空を仰ぎ見る。

「それだけのことって思うだろ。俺もそう思った。当たり前だけど、何もみんな一人の人のすべてを知ることができないじゃない。ただへえって思うだけいいのに。俺だけが特別な生徒じゃないとわかっていたし。けれどもどうしても超えられない一線が俺の前には引かれているんだ。先生はそれを超えようとしなくていいし、より鮮明に一線を引いて関わらない方法を教えてくれたけど、目の前に超えられないものがあることだけは、どうしても変えられないんだ」

俺は欄干の先に出ている伊藤の手を握った。一瞬びくりと反応した後、ゆっくりと握り返してきた。

今ここに、寂しさがある。孤独がある。心の中を映す暗闇がある。同じ場所にいる時くらい、その寂しさを紛らわすだ

けでもいい。手を握ることくらいなら、俺にだってできる。

伊藤の手は、湿っているような冷たいような不思議な肌触りがした。ここまで同じ距離を全力で走ってきた、人の手だ。同じ深淵の中にいる相手だとわかって、やっと握れた手がある。それだけのことをどうして二十年前にはしてやれなかったのだろう。ただ人の手を握るだけのことが、どうしてできないのだろうか。

「帰るか」

声をかけると伊藤は頷いた。もう一度力を込めて握ったあとゆっくり離れた。

自分が先頭になって、伊藤は3歩ぐらい遅れて自宅へ歩いた。十代、二十代なら俺たちは友達になったかもしれない。また遊びに来いよとか言いながら、しばらく遊び相手として過ごしただろう。でも、俺たちの出会い直しは少々時間が経ち過ぎている。俺には、働いて返さないといけない借金や生きるために店を続けていく責任がある。うちで働けなんて言えるような余裕はない。伊藤、応援しているから自分で頑張

れなんて言えるような立派な立場でもない。本当に言葉が意味をなさなくて、だから手を握ることしかできなかった。自分の範疇を超えた先にいた同級生にできることはこれくらいなのかもしれない。

自宅に戻ると、既に母屋には誰もいなかった。伊藤はリュックを受け取ると、ありがとうと言って再び暗いあぜ道に戻っていった。少し寂しいような気がしたが、日常に戻っただけだった。紅美からもらった筑前煮は相変わらずおいしかった。もしかしたら親戚だという伊藤の家でも、同じ味を食べているのかもしれない。

伊藤と数カ月ぶりに会ったのは、店舗近くの下水道管工事があった時だ。周辺店舗や住宅に影響がある可能性があり、市役所の職員や業者等が店舗にやってきた。昼営業と夜営業の間の作業で影響は殆どない。確認のための立会で協力するような形だ。店内の配管の不具合もあり、一緒に来る業者に

見てもらえるよう調整した。市役所から来た二人と業者三人の作業着の男たちの中に、力のなさそうな見覚えのある男がいた。

「今日は店舗の中の配管もお願ひいたします。休憩や荷物置きに店舗の中を使っていたいて大丈夫なので」

伊藤に挨拶しようとすると、ふいっと視線を逸らされた。

「どうも。ありがとうございます」

知り合いと悟られたくないのか、まったく取り付く島もなかった。

「あれ、SNSやってるんですか？」

業者の一人が入り口に貼られたチラシを見て尋ねる。

「はい。先月から始めてまだまだなんですが、二十代の人や地元以外の人も時々来てくれるようになって、やってよかったなあと思いますよ」

「後で登録させてください」

「ありがとうございます」

先月子どもが生まれたと優弥が報告に来た。休みを合わせ

られなくて、営業中の店舗に連れてきた。育休も取り、しばらくは子どもの面倒を見たいそうだ。学校現場の忙しさもさることながら育児もハードワークだと、疲れた顔で幸せに相好を崩した。近況を話しながら、SNSを使ったプロモーションを勉強している教え子から、ゼミに協力してくれる店舗を探しているとの連絡を受けたという。条件はSNSを利用していい飲食店ということで、そっちに全く手を付けていなかった中華料理店が候補に上がったというわけだ。技術や知識はある。しかし自分から踏み切れなかったのは、あの失敗があつたからだろう。地道に、地元で愛される店舗で十分だと思っていたが、宣伝をしなければ客足は減る一方だ。

ゼミ学習の一環で行うので代行運用は無料、写真の提供や最終的な監修を引き受けて運用を始めた。軽い気持ちで引き受けてみたが、学生たちは真剣だった。中華料理四川のプロモーションを続けてくれて、着実に客足が伸びている。この学生たちの中から、学生時代に出会った先輩のような起業家も現れるんだなと思うと、楽しみになった。自分は見ること

のできなかった広い世界を見られる可能性があるのだ。そういう将来がある若者たちは、小さな中華料理店のSNS一つにもひたむきになってくれるのだ。

紅美も忘れずに店へやってきた。空いている時間に来られて、伊藤といた時のことをみっちり聞かれた。ただ何となく心配だったからという、大人になっても助けられない人っているから翼らしいと言われた。そんな立派な理由でもなく、ほとんどは残ったご飯を食べさせていただけだ。紅美も親戚で同級生で、中学生の時の態度が棘のように刺さっていたのだろう。家に帰ってきたとなれば、親戚付き合いだって続くはずだ。

成人の行方不明、伊藤という人物のせいか、行方不明者発見は地元の話題にはならなかった。紅美に伊藤とゲームしたり犬の散歩を頼んだりしたことは話したが、佐伯先生の一面と伊藤の手を握ったことは言わなかった。ただ一緒に生活していた時期があっただけ。中学生のとき消化不良を起こした出来事が、何かの拍子に飛んできた。地元にいればそういう

ことだってある。

「うちの伊藤ってこの辺の出身なんだけど、知ってる？」休憩に使ってくれと店舗を開けて、お茶をカウンターに並べておいた。伊藤だけ姿が見えないまま、作業着の男たちが椅子や小上がりのふちに腰かける。

「さあ。ちょうど店長さんと同じぐらいかなとは思うけど、二人は顔見知りじゃないみたいだね。さつき挨拶していたけど、学年は違うのかな」

「あーちよつとわからないですね。学年違うとだいぶ」あまり会話に加わりたくなくて、厨房に留まる。伊藤はどこにいるんだ？

「伊藤ってやつは変わったやつでさ、会社でも浮いてるんだよね。余計な事はしないからいいけれど、あのしれっとした態度でベテラン勢からだいぶ反感かっているんだ。あまり人もいないから、一緒に現場行きたくないって言われちゃうと困っちゃってもう。しかも、ホモだって噂」

「うわゝ気色悪いな」

「え、初めて聞きました。いるんだ」

「この辺の会社を渡り歩いていたやつで、知り合いがいたんだよ。ホモだかゲイだか知らないけど、そんなのと一緒に仕事してみろよ。脳と身体が違っている？ 病気だとか生まれつきだとかテレビなんかじゃ言っているけどさ、本物は気持ちが悪い。鳥肌が立つよ。社長に慣れるまで面倒見てやれて言われる身にもなつて欲しいね」

伊藤の噂話は、俺の居心地を悪くした。

俺は、伊藤に向けられてきた言葉の暴力性を知っている。差別的な言葉であること。気丈にしているけど、心のどこからかは、血が流れていること。それでも、伊藤は最大限気にしないよう自分自身にも、他人にも振舞っている。佐伯先生とクソみたいな理論を話し合った？ なんで伊藤はそんなことをしなきゃいけなかったんだ？ 嫌みったらしい言葉を聞き慣れるような人間になることを、受け入れるしかなかった。だから伊藤には、ずっとずっと超えられない世界との一線が横たわっているんだ。

あの日、伊藤を追いかけて必死になった紛れもない事実が、俺にはある。

『その汚い口を今すぐ塞げ。お前たちに吸われる空気さえ、もったいない。卑しい言葉で俺の店を汚すな』

ゲイが嫌いなら勝手に気持ち悪がつていればよいだけのことだろ。伊藤だって誰かれ構わず、好意を持つわけではない。俺はこの二人よりも本当の伊藤を知っている。ゲイでもない、虐められた同級生じゃない、暗闇の中を一生懸命走った同じ孤独の中にいた伊藤を知っている。

俺は今ここで、二人に反論することだってできる。伊藤とは初対面だと偽っているし、こいつは他愛のない会話でも差別的な思考を許さない、生意気な若造、くらいにしか思わないだろう。この場にいる人も調子のよかった会話の流れを止められたことに気を悪くするだけで、一時間後にはどんな話をしたかさえも忘れているだろう。

なんだ、俺は、冷静に自分の立場をよく理解しているじゃないか。伊藤に対してだけじゃない。人権や人の気持ちちい

った立場から、彼らの態度に怒りを覚えたのだ。社会に出て仕事をするなら、その場にいる人が不快に思う言動を控えることくらい当たり前だろ。俺は、もう、誰かを孤独にする一人にはなりたくないんだ。

それでも、自分の口からは、なんの言葉も出てこなかった。伊藤を守ったり、下種な会話を咎めたりできるセリフが、身体のだこにもなかった。あの夜の伊藤との出来事が、ただ胸中でぐるぐると渦巻いていた。

「岩井さん、こちらいいですか」

厨房の奥から伊藤の声がする。蚊が鳴くよりも大きいのが、客席には聞こえない。

矛盾や葛藤を抱えたまま、沸騰した頭で見る景色は、霞み、淀んで見える。申し訳なくて、伊藤がいる方向に視線が向けられない。伊藤を直視できないのは、俺が、今も間違っているからだ。

「岩井さん、店の配管の繋がりのことで、図面とパイプを確認していただきたいのですが」

厨房の中で、パイプの中を覗き込んでいた伊藤が立ち上がり視線を合わせた。

「はい。今行きます」

声が震える。俺の喉と胸のあたりは、熱湯を飲み込んで火傷したみたいに熱い。客席の会話は、厨房の奥まで届く。他に客がいなければ尚更だ。あいつは、会話の内容を分かっているが、無表情のまま俺を呼んだのだ。

「おっと。呼ばれちゃったね。後ろに気をつけろよ、岩井君」

俺をからかいつつ、笑わせようとする冗談。それは、俺を普通の人間と、そっち側の人間じゃないと認める証明だ。

その一言の意味に気づかないふりをして、“足元に気をつけろ”と勝手に言い換えた。顔の皮膚の余計な部分が引きつらないように最大の注意を払い、はい、と答えておいた。胸の内はさらに激しく動揺した。客席の人間に対する怒りと伊藤に対する罪悪感がせめぎ合い、俺は俺自身の味方になれな

った。

伊藤の側を覗くと、伊藤の視線は地面を這うパイプに戻っていて、うまく表情を読み取ることができなかった。ずっと下を向いて作業をしていたせいだろう。顔に血が集まって、帽子の下わずかに見える額に汗をかいていた。ふと天井を仰ぎ、軍手をつけたままの手で額をぬぐった。その姿は、淡々と仕事をこなす、ただの一人の技師だった。だから、近づいていく俺の姿なんか、視界に入っていない。

伊藤の隣で膝を付いた。隣にしゃがむ男を見ずに、水が染みて灰色を濃くしたコンクリートの地面と向かい合った。

伊藤、今が最高の機会だ。俺の息の根を止めるつもりで睨んでくれ。最低の人間だと蔑んでくれ。結局は体裁だけを気にするやつだと。言葉にしなくていいから、俺はその一瞥で、すべてを理解するから。

俺はあの人たちに、お前が中学の同級生だったとは言わない。一緒に過ごした時間で、友達になれるかと思ったことも言わない。そうやって俺は、当事者から外れていくんだ。

二人で覗き込んだ配管の中は、辺りのどこよりも深く暗く、あの日の夜が流れ出てくるようだった。

〈了〉